
ロボットな女の子

しゃけ椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボットな女の子

【Nコード】

N9445R

【作者名】

しゃけ椿

【あらすじ】

“大丈夫です。ロボットですから”
曲がり角でぶつかった相手は運命の人でもなければ普通の人でもなかった!? 謎の電波少女と、ふとしたことで関係を持ってしまった少女の友情物語

ブログ・電波的な出会い（前書き）

初投稿で不定期掲載します。けどなるべく早めにupできるよう頑張ります！p(´、´q)

プロローグ・電波的な出会い

「はあっ、はっ、はっ」

吉井知佳は走っていた。

理由は朝礼のチャイムが鳴っていたからだ。鳴り終わるまでに教室に入らなければもちろん遅刻。担任がいなければセーフだが、あいにくきつちりした担任なのでその期待は薄い。

しかし、廊下を駆ける知佳の表情は涼しい。教室は目前だから。次の角を右に行くはずだ。

「楽勝、楽勝」

そのままの勢いで角を曲がる。だが、それがまずかった。

「きゃー！」

予期せぬ衝撃に思わず目を瞑る。誰かにぶつかった感覚、しりもちをつく。

「つつう……」

自分に怪我がない事を確認して、ハッとぶつかった相手を見やるが遅かった。

「大丈夫？」

スツと差し伸べられた手。

運命的なシチュエーションを予感し一瞬ドキツとしたが、そこにいたのは同性だった。自分よりも華奢なその手をつかみ立ち上がる。

「あ、あなたこそ大丈夫？」

申し訳ない気持ちよりも、残念な気持ちが勝った声音で訊いてしまふ。

「はい、ロボットですから」

無表情で彼女は答えた。

「は？」

「本日は起動してまだ一時間しか経ってない故、レーダーも本調子でなくあなたが飛び出してくるのを予知出来ませんでした」

返ってきた言葉の意味を飲み込めず立ち尽くす。

「では」

混乱している知佳に軽いお辞儀をし、彼女は去ってしまった。

ロボット、ト……？

彼女の言った言葉が頭の中で何度もループする。しかし、こんなことに気を取られてる場合ではない事も同時に思い出していた。

「あー、遅刻かぁ」

重い足取りで教室に一步踏み入れる。が。

あれ……？

予想とは裏腹に、担任はおらず。それどころか生徒達はまだ休み時間同様に騒いでいる。

「おはよー、知佳。良かったねえセーフじゃん」

ぼかーんとしてる知佳の肩を叩いたのは親友の詩垣麻衣だった。

「え、セーフ？」

「今のは予鈴だよ。本鈴だと思って走ってたんでしょ？ もう笑っちゃおう」

ふと、時計を見るとまだ朝礼開始の時間までは五分あった。早とちりに気づき少し恥ずかしくなる。

「なっ、なんで走ってる事までわかるわけ！？」

「何年一緒にいると思ってるのよ」

ニヤニヤする麻衣に納得いかないまま自分の席に着く。

やがて本鈴も鳴り、生徒達は自分の席に着き始める。そんな光景を眺める中、知佳はふと目を疑う。

あの子、同じクラスだったんだ。

さっきぶつかった女生徒が窓際の席で読書をしていた。

一話・コンタクト

板野さん……かぁ。

フルネームは板野ゆかり。朝礼直後の出席点呼で彼女の名前を知った。

今朝ぶつかるまでは存在すら知らなかったクラスメイト。なんで今更気になるのだろうか？ 唐突に電波な事を言われたから？

「どしたー？ ボーっとして、頭でも打った？」

隣の席の麻衣から声が掛かる。

「なんでそうなるのよ？」

「いつものノリ突っ込みがなーい」

麻衣はつままないとはかりに頬を膨らませた。

「私は芸人か？ ていうかいつもそんな事してないし」

「知佳、冷たい。これでも心配してるんだよ？」

「うーん、ちよつと考え事」

「知佳が考え事って珍しいねえ」

「私も考え事くらいするんだけど」

「だよなー」

クスクスと笑う麻衣。ああ、馬鹿にされてるなこれは。

「で、何？ ウチで聞ける事なら聞くよー？」

知佳は少々迷ったが、考え込むよりは情報を集めた方が賢明だと判断した。ただし、麻衣は宛てにならないだろうが。

「板野さんって、何者？」

訊くとしばらくの沈黙。麻衣は板野さんの方角を向き、何か考えてるようだった。やがて知佳の方に向き直り笑顔で答えた。

「何者も何も板野さんは板野さんでしょ。いつも読書してるおとなしい子」

「はあ……」

予想通りの結果に溜め息が出る。見たまんまじゃん。

「なんで溜め息？ 確か今年この高校に転校してきたんだっただかな」
少しはマシな情報だ、と心の中で褒める。

「今朝、ぶつかった時なんだけど自分をロボットだとか言ってたけど……そこは何か知ってる？」

本題を切り出したはいいが麻衣は啞然とした顔になり、やがて吹き出してしまった。

「あっはははっ！ 予鈴に慌てて人にぶつかるなんてさっすがっ！」

大笑いする麻衣。

「反応するところはそこじゃあないー！」

そして、すかさず突っ込み。

「あはは、ごめんごめん。けど板野さんかあ話した事ないなあ」

まだクラスに馴染めてないから一人なのか、板野さんを見ると相変わらず読書している。

「でも自分がロボットなんて面白い事言うねえ。もしかしてそんなので考え事してたの知佳？ ちょっと可愛いかも」
「うるさいなあ」

他の人に板野さんの事聞くのはやめよう。自称ロボット説の事を訊いたら麻衣に限らずバカにされそうだからだ。

それにしても寂しそうな目をしていて、と今更ながら思う。あの時一瞬目が合ったただけだが直感的にそう感じていた。

「ハッ！？ まさか！」

麻衣が突然驚きの声をあげる。

「ん？」

「板野さんに恋、しちゃった？」

「なんでそうなる」

「違うんだ？」「違う。大体私にそういう趣味はない」

「えー、良いと思うけどなあ」

しょぼーんとうなだれる麻衣。何が良いのかさっぱり分からない。

「とにかくこの話は終わり」

「そんな〜!」

「アンタは他にやるべき事があるでしょ」

「へ? 何それ?」

「宿題、やってきたの?」

知佳はノートをひらひらと振って見せる。ノートの中には一限目の数学に提出の宿題が記されてある。

「あつ、そうだった! ありがとう。やっぱり持つべきものはなんとやらだね!」

友達だ! と心の中で突っ込む。呆れて言葉には出せなかった。

溜め息を吐き、板野さんをちら見する。外見は全然可愛かった。背は低く肌は色白、髪もサラサラのロングで綺麗だ。全体からは清楚な雰囲気漂っている。

すぐ友達が出来そうなのに孤立している事が不思議でならなかった。

昼休みの屋上。

知佳と麻衣は天気の良い日は大概ここで昼飯を食べる。今日も二人はそこで昼食にしていた。

「いやあ助かったよ知佳」

「助かったよじゃないでしょ。まったく、呆れを通り越すわアンタ

には
「

麻衣は数学に限らず全科目の宿題をやっていないかったのだ。何を考えてるのか、もしくは何も考えていないのか。

「字もきれいだし知佳って実はロボットなんじゃない？」

そう言っつてニヤニヤする麻衣。実はあの話の後からネタにされてる。

「もう！ その話は終わり……っつて」

知佳の言葉が途切れる。なんと屋上の片隅に板野さんを発見したのだ。

「噂をすれば板野さんだね」

「噂はしてないけどね」

「何してるのかな？」

よく見ると板野さんには小鳥が何匹か群がっていた。パン切れを持ってる事から鳥に餌をあげてるのかもしれない。

「良い子じゃん」

「うん、あれ……？ 何か喋ってない？」

確かに何か喋ってるらしかった。ただ、この位置からは聞き取れない。

「行ってきなよー」

「わっ！？」

突然背中を押された。振り返ると、麻衣は親指を立てて笑んでいる。何がグツジョブだ。

けど、今朝は謝り忘れたというのもある。もしかしたら例の事を聞き出すいい機会にもなるかもしれない。

少しずつ板野さんとの距離を縮める知佳。そして目前まで到着した。

「あ……の、板野さん？」

ぎこちなく声を掛ける。

「はい？」

振り向いた板野さんは無表情で、やはりどこか悲しげな印象があった。

「あつ、あの……今朝はごめんなさい」

「別に気にしていません」

「……………そう」

話がこれ以上繋がらず気まずい。変に緊張して頭の中がごちゃごちゃになる。

「と、鳥に餌あげてたんだ？」

とっさに訊くと板野さんは小鳥たちの方に顔を戻した。

「餌、と言うより情報料です」

「は？」「この子達には他のクラスの監視をお願いしていたのです。これはその情報のお礼です」
「な、何の為に？」

電波的な内容だが、ここで折れたら何もわからずじまいだと自分に言い聞かせる。

「私がここに送り込まれた理由は生徒の監視……もといデータ収集と観測です」

「そ、そうなんだ？ というか今朝の……ロボットってどういう意味？」

「そのままの意味です」

さも当然のように言う板野さん。

「ど、どの辺がロボ？」

「これ以上余計な詮索はやめてください。訴えますよ？」

訴えたところでまともに取り合ってくれるのだろうか？ まさかボケたのか？ とか思わず考えてしまった知佳だが、気分を害したのは間違いなさそうだった。

「用がないなら」

「板野さんって面白いねー！」

突然、麻衣が割って入った。

「面白い事を言っただつもりはないのですが」

「うちのクラスにロボットがいたとはねえ、うんうん！」

「ちよ、麻衣」

状況を悪化させかねない麻衣を止めようとする。

「このことは他言無用でお願いします」

そう言つと同時に、板野さんは立ち上がり背を向けた。なんか悪い事をした気分だ。

「ねえ、板野さん」

麻衣が呼ぶと板野さんは振り返った。

「放課後暇ー？」

「なぜです？」

少し怪訝そうな顔になる板野さん。

「ケーキ食べに行くんだけどよかつたら板野さんも行かない？」

「ちよ、麻衣……！」

いきなり誘われて行くはずがない、と思つた矢先だった。

「ご一緒します」

「へっ？」

「良い機会です。情報収集の為にいきます。情報収集の為に、です」

情報収集、という言葉強調し板野さんは去って行った。

電波だ………というか今のはすごい感じ悪い。

「なんで誘つたのよ」

「たまにはいいじゃん、他の人誘うのも」

「けどよりもよって」

「いろいろ聞けるチャンスだよ」

と肘で突かれた。意味が分からない。多分……いや絶対、麻衣は勘違いをしている。

放課後。板野さんも交え三人は目的の喫茶店へ向かっていた。

「この前、新作出すって言ってたから楽しい！ どんなのかなあ」

一人盛り上がる麻衣。で、しつかり付いて来る板野さん。そういえばロボットはケーキとか食べても大丈夫なのだろうか？ まあ、本気でロボって事はなさそうだけど。

「ケーキ食べれるの？ 板野さん」

さりげなく訊く。

「私は人と神とのインターフェイスです。限りなく人間に近く作られており潜入任務をしている為、疑われないよう人間の食べ物は大体口にする事が可能です。なので問題ないです」

「ふーん、そうなんだ」

理解出来ないがケーキは食べれるらしい。ここで突っ込んで、また気分を害したらめんどくさい事になる。

しかし、改めて見ても板野さんはやっぱり人間だ。それに美人の

部類に入るように思う。

「どうしたんですか？ ジロジロ見て」

「へっ！？ あ、いや。どう見ても人間だなあと」

いつの間に見入っていたのか焦る知佳。

「見てもわかりませんよ？ それだけ精巧に作られていますから」

得意げになる板野さん。なんか鼻に付く。

「よそ見していると見失いますよ」

そう指さされた先には麻衣がいる。というか距離が遠い。

「場所は知ってるしはぐれても大丈夫だよ」

そう言っつて足を進める。それにしても、板野さんと普通の会話をしていないな。そう思った時だ。

「吉井さんは彼女の事……詩垣さんの事、好きですか？」

一瞬、思考が止まる。

「はあ！？ 何言っつてんのよー！」

「なんでそんなに驚くんんです？」

「そりゃあ驚くでしょ。いきなり変なこと言わないでよっ」

そりゃあ友達としては好きだけど……っつてそういう意味で言ったのかな？ まさか変な勘違いした？ だとしたら麻衣のせいだ！

「大切にね」そう小声で言われた気がして板野さんを見ると、もう先を歩いていた。

「待って、そこ道違うし」

「なら早く歩いてください」

「はいはい」

気のせいか、からかわれてるような気分になった。

「遅いよ二人ともー」

店の中では麻衣が膨れっ面になって待っていた。

「や、張り切りすぎだって。勝手に見繕ってるし」

ケーキは既に三人の席に用意されており、板野さんは自分の皿の上を見つめる。

「これは……？」

「それおすすめだよー、元祖チーズケーキ！ この店が初ならまずはこれだよね。あ、ロボだから食べれない、とか言わないですよ」

「いえ、大丈夫です。私は人と神のインターフェースであり限りなく」

「それはもういいから」

「お、いつの間に漫才出来る程の仲に？」

「別にそんなんじゃないし」

思わず突っ込んでしまった。というかこの二人はボケる点で似ている。板野さんはボケてないつもりかもしれないけど。

「板野さん、飲み物とか大丈夫なの？ 錆びたりしないの？」

「問題ないです。体内でオイルに変換されるようになってますので。工口的要素もあって水でも変換可能です」

「へえ、すごいすごい！」

そんな事で胸張られてもな。それよりも麻衣が本気で板野さんをロボットだと信じてないかが心配になる。

そして三人は一時間程して店を出た。

「今日はいろいろ情報が得られました。ご協力ありがとうございました。す」

それらしい話はしてない。いや、ケーキの情報の方かな？

「まったねー」

「さよなら」

「ありがとうございました」

板野さんは家が反対方向らしく、その場で見送る事にした。小さな背中がより小さくなる。板野さんは一度振り返ったがすぐに向きを直し、やがてその影は見えなくなった。

「やっぱり変な子だ」

「面白いキャラ作りだよねー、なんで一人なんだろう？」

「さあ？ 観測とやらで忙しいんじゃない？」

それが、誰も彼女の話に付いていけないとか。

「けど楽しそうだったよね」

「そう？」

「うん。ちょっとだけど笑ってたし意外によく喋るし」

麻衣は人のことよく見てるなあ。けど言われてみれば楽しんでいたように感じた。少なくとも嫌そうではなかった。

「今度また誘っていい？」

「私はいいけど。意外にウザくなかったしね……って、あれ？」

地面にある物を発見した。拾い上げる知佳。

「わっ！ これって」

「まさか、板野さんの？」

その品は意外な物で、私達はしばらく顔を見合わせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9445r/>

ロボットな女の子

2011年10月8日21時58分発行